

東西文明の比較 (29)

▽「聖徳太子」の一断代▲

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

「聖徳太子」、または「厩戸皇子」について述べるには、あまりにも知識が少ない私です。しかし、この連載(東西文明の比較)を続けるためには、どうしても触れないわけにはいきません。色々ご批判を受けられることを承知の上で、その一断面を記そうと思います。

🏛️ フェノロサが描く「聖徳太子」

明治政府によって興された「歴史と文化の創造運動」が、ひとつの原点です。政府によって招聘されたアメリカ人のフェノロサ(1853～1908)や岡倉天心等が中心になった「古美術」調査が行

われました。その中心は法隆寺でしたが、近隣の中宮寺・法輪寺・法起寺なども含まれました。その調査手法は、西欧流の科学的手法が用いられた日本最古の調査で、現代にも通じるものでした。

フェノロサの遺稿「東洋美術史綱」にある「聖徳太子」を飾る言葉を列挙してみましよう。

「推古朝の芸術家」

「東アジアの賢聖に伍するほどに非凡の才能」

「仏教のコンスタンティヌス大帝」

「あらゆる改革の中心人物」

「中国の梁の武帝以上の存在」

そして「若い太子」などです。

併せて「聖徳太子」の時代に対しても、その評価は尋常ではありません。

「日本の最も成長すべき青年時代」

「日本の最初の文化隆昌期」

イギリスのエリザベス朝やビクトリア朝の呼称に倣って、

「推古朝」

「推古時代に前途洋々たるすべりだしをみた若い日本美術」

「最初の日本固有の美術様式は推古様式」

等と賛辞を惜しみません。要するに、「最初」「青年」「成長」「若い」と感じ取って、それを「推古時代」と名付けたのです。そして、それを推進したのが「聖徳太子」であるとなりました。

🏛️ 仏教のコンスタンティヌス大帝

フェノロサがコンスタンティヌス大帝と「聖徳太子」を比較したのは理由があります。

コンスタンティヌス大帝は、ローマを再統一し、東のコンスタンティノブルに首都を建設して、ギリシャの美術品を飾り、更に、これまで迫害されていたキリスト教を公認して、国教化の道を開いたと言われます。

一方、「聖徳太子」は、氏族間の紛争を収めて日本の統一を図ったと考えました。「憲法の起草」「冠位十二階制定」「遣隋使派遣」「史書編纂」などの業績を挙げています。更に斑鳩宮や法隆寺を建設して、外来性豊かな仏教美術を導入して、これまで迫害されてきた仏教の国教化を推進した指導者である、としました。フェノロサは、まさしく両者はそっくりだと言います。しかし、この両者比較で最も意識するのは、仏教の存在です。

「推古天皇と聖徳太子の最大の事業は、疑いもなく、仏教と仏教芸術を確固たる輝かしい基盤の上に据えたことである」と、フェノロサは明言しています。

🏛️ 一瞬輝いた「朝鮮美術」

フェノロサは、「聖徳太子」の時代について、朝鮮美術との関係を挙げています。例えば、「日本最高の木造建築、法隆寺」は朝鮮の寺院建築の例証であり、金堂の玉虫厨子と夢殿の救世観音像は、朝鮮人の力量を示す作品だと述べています。

この時期、推古天皇から全権を委任された「聖徳太子」は、朝鮮から学者・仏僧・建築家・木彫家・鑄造技師・塑工・左官・塗金工・瓦師・織工などを招聘することに全力を挙げました。自らも、これらの知識や技術を研究して、指揮・監督しました。その成果が、法隆寺や中宮寺などの伽藍や仏像・仏具に凝縮しています。「聖徳太子」のこのような熱意は、仏教の「国教化」が目的であったのでしょうか。なお、「聖徳の法号」を付され、僧侶の資格を得て仏教を

講義したとも言われています。

あまり知られていませんが、朝鮮美術は、「聖徳太子」の時代には一時的にせよ、中国や日本を凌ぐ時期があったとフェノロサは言います。朝鮮固有のものも見られますが、インド・ササン朝ペルシャ・バビロニア・ギリシャなどに起源を持つ様式が、漢以降の中国を経由して、仏教と共に推積され、短期的ではありますが朝鮮美術として結実したとみています。

「日本最初の偉大な傑作」釈迦三尊像

「聖徳太子」は、このような希有な朝鮮美術に遭遇しました。そして、これらの諸要素を学び、選択吸収して、「日本最初の偉大な創造活動」が出来ました。

法隆寺金堂の釈迦三尊像は、「聖徳太子」の指揮監督のもとで止利仏師が鑄造したのですが、西アジア・ギリシャ、そして中国の呉や朝鮮美術の要素を結合させて完成したものです。

フェノロサは、「独創的な制作」「日本という新しい国における最初の制作」「日本最初の偉大な傑作」であると驚嘆しています。ここで注目する点は、フェノロサの次の意見です。

「聖徳太子」による「推古様式」は、希有な時期の朝鮮美術とは太い関係を持ちながらも、一方では、世界のいずれの系列にも属さない「独創性」を持っていた、ということです。こうした傾向は、仏教の国教化に由来するものであり、ここに「俊敏な着想と精神の柔軟性」に基づく「島国民族の文明」が誕生した理由として挙げています。そして、その先導者として「聖徳太子」を指名しています。

「欧米の観客」としてのフェノロサを迎えた日本は、はじめて「世界の中の日本」を見つめることになったといえるでしょう。また、フェノロサも極東の端に、素晴らしい文化を持った日本を発見し、その創造者の中心が「聖徳太子」であったことを知り、感嘆したのです。

岡倉天心の「聖徳太子」

フェノロサと共に「歴史と文化の創造運動」の中心をなした岡倉天心は、「聖徳太子」をどのよ

うに見ていたのでしょうか。岡倉天心の「論」を端的に言えば、「唯心論」です。

欧米美術は、「精密・実物・器械・写生」を主体とした「唯物論」です。それに対する「唯心論」。

「形体」に拘束される「唯物論」は文明を滅ぼし、「精神」や「観念」が強鋭である「唯心論」は、文明を興す、というものです。「写生」や「実物」以外に「美」を認めるべきであり、「推古時代」の美術彫刻がまさにそれであると、述べているのです。

岡倉天心は、「仏教の哲理に基づき、唯物に反して唯心に傾けるにあるが如し」と語ったように、仏教の影響を認めていました。

天心は、「唯心論」の起源を中国に求めています。それは、漢・魏以降、六朝の仏教美術や文化に「東洋美術の原素」を見出し、その精神こそが唐の文化を生み、日本では「推古の盛時」を築いたと指摘します。「唐代」と「推古時代」とは兄弟関係で、時系列で見れば、「推古時代」が兄になります。なお岡倉天心は、日本は中国の美術や文化を直接受け入れたのであって、フェノロサとは異なり、朝鮮美術の存在を認めていません。

仏教派「厩戸皇子」

岡倉天心は、もし「厩戸皇子」や蘇我馬子らが、「敬心派」の物部守屋等に敗北していたら、その後の「日本美術は、その性質を異にしていた」と仮説を述べています。それほどに、仏教と美術の関係は、動かしがたい「事実」なのです。日本の美術は、仏教と共に興ったのは、「推古時代」であるから、「我が美術史は推古時代」に生まれた、換言すれば、それ以前には日本の美術史は存在していない、ということになります。そして「日本美術史」の生みの親が「厩戸皇子」と言うことになります。

「聖徳太子」論は、「絶賛論」から「存在否定論」まで、数え切れないほどの意見があります。その時の政治が、「聖徳太子」を利用してきたのは事実です。その「是非」は別として、そのような人物は、他にいないのではないのでしょうか。私としては、それぞれが、独自の「聖徳太子」論を持てば、日本の歴史が楽しくなると考えますが、如何でしょうか？